

口演発表：2日目
9月22日（日）

医学部1号館3階講堂（A会場）

【口演】2-A-01, 02, 03

時間：8:50-9:35

【口演】2-A-04, 05, 06

時間：9:35-10:20

医学部1号館1階講堂（B会場）

【口演】2-B-01, 02, 03

時間：8:50-9:35

【口演】2-B-04, 05, 06

時間：9:35-10:20

口演発表 9月22日(日)

A会場:医学部1号館3階講堂

A会場 8:50-9:35		コミュニケーション教育	
座長:藤崎和彦(岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 教授)			
副座長:孫大輔(東京大学院医学系研究科附属医学教育国際研究センター 講師)			
2-A-01	研修歯科医が困難を乗り越える心理社会的プロセス	伊藤香恋	九州歯科大学 総合診療学分野
2-A-02	ヘルスコミュニケーションのベースを育む ー内観法の活用ー	橋本章子	帝京大学医技術学部
2-A-03	統合失調症者のレスパイトを受け入れる精神科病院の看護に関する質的研究	石橋昭子	国際医療福祉大学 福岡看護学部

A会場 9:35-10:20		異文化コミュニケーション	
座長:宮原哲(西南学院大学文学部外国語学科 教授)			
副座長:大野直子(順天堂大学大学院医学研究科医科学専攻グローバルヘルスリサーチ 講師)			
2-A-04	「不確実な」臨床コミュニケーションにおける信頼:本邦とデンマークにおける機能性疾患の患者調査から	本間三恵子	埼玉県立大学健康開発 学科健康行動科学専攻
2-A-05	文化スキーマを考える～異文化間を移動する人たちの事例から～	小柴裕子	京都精華大学
2-A-06	病院通訳者の通訳の正確性に関する分析の試みーコーダー間信頼性の検討ー	濱井妙子	静岡県立大学看護学部

口演発表 9月22日(日)

B会場:医学部1号館1階講堂

B会場 8:50-9:35		地域保健	
座長:武林亨(慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室 教授)			
副座長:島崎崇史(上智大学文学部 講師)			
2-B-01	住民参加型アプローチを用いた「健幸かるた」の作成と普及	齋藤彩	慶應義塾大学先端生命科学研究所「からだ館」
2-B-02	地域組織活動活性化要因の把握と尺度の開発	蝦名玲子	東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学
2-B-03	地域で看護職が実践する社会貢献活動の特性—在宅精神療養者を支援するNPO活動の事例から—	成 玉恵	千葉県立保健医療大学

B会場 9:35-10:20		メディアコミュニケーション(WEB、VR、動画)	
座長:池田光穂(大阪大学 CO デザインセンター 教授)			
副座長:原木万紀子(立命館大学共通教育推進機構 特任招聘准教授)			
2-B-04	健康をデザインする ~経験・知恵・アイデアの共有・統合・共創を目指す“領域”と超えた創発プラットフォームの挑戦	戒田信賢	京都大学医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学
2-B-05	ヘルスコミュニケーション分野での仮想現実(VR)活用領域の可能性に関する検討(実践報告)	秋山美紀	慶應義塾大学環境情報学部
2-B-06	医療従事者と患者の共通理解を得るための新しい試みと可能性	飯村隆志	特定非営利活動法人健康サポーターJAPAN

研修歯科医が困難を乗り越える心理社会的プロセス

伊藤香恋¹⁾ 永松浩¹⁾ 鬼塚千絵¹⁾ 板家朗²⁾ 木尾哲朗¹⁾

1) 九州歯科大学 総合診療学分野 2) 吉田しげる歯科

【背景・目的】レジリエンスとは、困難に直面し心理的にネガティブな状態に陥った時に、自己を立て直す能力であり、社会生活を営む上で必要とされている。臨床研修を通して、困難に直面することの多い研修歯科医の心情の変化を明らかにすることは、質の良い、効果的な指導に有益と思われる。板家らは、研修歯科医が主体的に診療に参加するようになる成長プロセスを明らかにしてきた。しかしながら、研修歯科医が臨床研修中の困難をどのようにして乗り越えているのかについては未だ明らかにされていない。本研究は、研修歯科医が臨床研修中の困難な状況から心理的回復に至るプロセスや、その中でレジリエンスがいかんして発揮されるのかについて明らかにすることを目的とした。

【方法】研修歯科医 9 名に対して「臨床研修中の困難を乗り越えた過程」に関する半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析した。なお、本研究は九州歯科大学研究倫理委員会の承認を受け実施した。

【結果】研修歯科医の感情がネガティブなものからポジティブなものへと変化した過程には、大別して「他者との関わり」「内面的な強み」「主体的実行」の 3 要素が寄与していた。研修歯科医は困難に立ち向かう中で、他者との関わりに支えられながら、内面的な強みを発揮し、それを高めながら主体的に解決策を実行していた。

【考察】上級医が「他者との関わり」「内面的な強み」「主体的実行」の 3 要素を、研修歯科医のレジリエンスを引き出す要素であると認識することで、研修歯科医の心理的負担を理解し、自信獲得に向けてサポートするための手掛かりとして活用でき、更に、研修歯科医自身が認識することは、自身の心身健康保持に有用である可能性が示唆された。

開示すべき COI はない。

ヘルス・コミュニケーションのベースを育む－内観法の活用－

橋本章子

帝京大学医技術学部

【はじめに】意思伝達的手段である言葉が、魔術のような働きをすることがある。難しい人間関係を友に語り、労われた時に湿疹や腹痛も消失した人、遭遇した事故を必死に説明している最中に悪意に満ちた言葉を浴びせられ耳が聞こえ難くなった人など、ストレスを察知し適切な言葉で解消できることは重要である。学生時代は自立に向けた準備期、モラトリアムといわれる時期である。《どのような人生を生きたいか》《どのような人になりたいのか》を考え、感性を磨く時期でもある。その感性をベースにヘルスコミュニケーションは育まれると考える。

【目的と方法】『なぜ医療人として生きることを選択したのか』医療を求めてくる人の気持ちに思いを馳せ、医療者の前で無力な患者が自分自身を語れるために、医療者が真摯にあるとはどういうことか、医療人としてのプライドとは何かを考え、ヘルスコミュニケーションの本質を知ることを目指した。心の健康を育む精神修養法である内観法を活用し、自らを語り、仲間の声を聴く作業を行い、命の重さを感じるために、自らの命について内観を行った。

【結果と考察】入院時の主治医が高校の先輩でその出会いが医師になるきっかけだったと語る学生や、東日本大震災の人命救助を目の当たりにし医療人を目指す学生がいる。入学への熱い思いを応援する親が学費を負担してくれると感謝を語る学生や、シングルマザーで頑張る親を語る学生もある。発表者の熱い言葉は、聴き手に感銘を与え、忘れていた気持ちを思い出したと多くの学生が記述した。記述には毎回コメントを返すよう務めた。一人では思いつけないことも、他学生との交流に触発され気づくことが多い。学生は《ヘルスコミュニケーションとは、人とのコミュニケーションによって健康を促進し、心と身体を健康にするために自分と相手の双方にとって利益のある関係を築きあげていくもの》と語る。

統合失調症者のレスパイトを受け入れる精神科病院の看護に関する質的研究

石橋昭子¹⁾

1) 国際医療福祉大学 福岡看護学部

【背景】レスパイトケアは本来家族介護者の休息を指すが、精神科領域では患者本人の休息も含まれることが特徴である。特に統合失調症者は疲れやすく、休息することが不得手である。昼田(1996)によれば、社会適応に破綻し急性の精神病状態に陥るまえには無理の時期があり、このようなときに短期間の休息入院をさせるとよい。数日から数週間休ませると、また元気を取り戻し社会生活が可能になる。しかし休息入院を受け入れた病院側の看護実践や看護の機能に関する報告は国内においてほとんどみられない。

【目的】統合失調症者のレスパイトを受け入れる精神科病院の看護を明らかにする。

【方法】調査対象者は、26年以上の精神科勤務歴を持つ看護師であり、2017年2月にインタビュー調査を実施した。得られた結果はSteps for Coding and Theorization(大谷,2019)を用いて質的データ分析を行なった。倫理的配慮として、個人情報保護に留意し、国際医療福祉大学研究倫理審査の承認を受けて実施した。

【結果】インタビューにおいて、療養者の主体的な欲求充足行動により、精神科病院の短期利用を行なったレスパイトの事例が報告された。受入側の精神科病院では、内と外からなる精神医療ネットワークにおいてレスパイト入院へのルートができていた。受入側の看護師は、訪問看護との情報共有や病棟での薬物管理、休養目的に向けたケアとしての見守りを実施していた。しかし関係形成は難しく、看護師の機能不全感が生じていた。レスパイトケア等の短期入院患者に対しては、新しい関係性による看護の必要性がある。

【考察】関係性の構築を基盤とする精神科看護では、レスパイトケアにおいて看護の機能不全が生じる可能性が示唆された。レスパイトケア等の短期入院の受け入れを行なう精神科病院においては、看護実践のパラダイムシフトが必要であることが示唆された。本調査は勇美記念財団の助成を受けて実施した。

「不確実な」臨床コミュニケーションにおける信頼：

本邦とデンマークにおける機能性疾患の患者調査から

本間三恵子¹⁾

1) 埼玉県立大学 健康開発学科 健康行動科学専攻

【背景】

現代の特徴として「不確実性」が指摘されるのと同様、臨床コミュニケーションでも、医師が診断、予後、治療の諸側面にわたり、不確実性の高い内容を伝えねばならない場面は多い。典型例として、いわゆる「不定愁訴」や器質的な異常に乏しい「機能性疾患」の臨床では、疾患概念にも未だ議論がある中、患者・医師双方が手探りの困難なコミュニケーションを強いられている。そうした状況を打開する一つの鍵は、満足度というより患者・医師の間の信頼をいかに構築するかにあると考えられる。

【目的】

本報告では、本邦およびデンマークの線維筋痛症(FM)患者の調査から、基本属性や主治医に対する患者の「信頼」、および関連要因等につき検討する。

【方法】

FM患者を対象に、線維筋痛症友の会、デンマーク線維筋痛症協会の協力を得て、facebook ページやメルマガで告知の上、ウェブ調査を本邦(完答 117 件)とデンマーク(完答 648 件)で実施。基本属性や病状のほか、一般的信頼、主治医への信頼等を尋ねた。

【結果】

回答者の性別は、女性が本邦 85.2%、デンマーク 96.9%、平均年齢は、本邦 48.2 歳、デンマーク 51.1 歳で、病状スコアに有意差はみられなかった。患者の現状・主治医との関係に関しては、ヘルスリテラシーは両国で有意差はないものの、医療懐疑度は本邦よりデンマークで有意に高い。これは医療に頼らず自力で対処する傾向とも解釈できる。主治医への信頼度は本邦が有意に高いが、特定の人物と関係なく、他者一般への信頼を示す一般的信頼は、デンマークの方が高い。また「信頼できる医師のイメージ」をSD法で尋ねたところ、デンマークに比して本邦はより「悲観」、「詳細」、「ゆったり」、「ソフト」なイメージであった。

【考察】

両国で FM 患者の医師への信頼、医師イメージが異なることが明らかとなった。報告では信頼度に影響する要因をより詳細に検討予定である。

文化スキーマを考える～異文化間を移動する人たちの事例から～

小柴裕子

京都精華大学

【背景】

発表者は、大学で日本語教育に携わる立場にあり、留学生や外国人児童生徒たちの抱える教育課題に直面してきた。彼らの文化背景は多様であるため、教育課題もまた多様であると言える。したがって、日本語支援だけではなく、様々な方向からアプローチする必要があると考えられる。西田ひろ子(2007、2008)は、異文化に接する際の「違和感」や「困難」は、「文化スキーマ(文化環境に合わせた神経回路網)」によると述べている。この「文化スキーマ」を解明することで、外国人児童生徒や留学生をはじめ、日本で働く外国人社員やその家族たちの抱える「違和感」や「困難」の解決にもつながるのではないかと。

【目的】

2017 年度の在日中国人児童生徒の意識調査、2018 年度の在中日本人生徒の意識調査、また 2019 年度の日本で働く外国人社員の意識調査から、「文化スキーマ」について考察する。

【方法】

異文化で感じる「違和感」や「困難」についてアンケートとインタビューを実施した。

【結果】

2017 年度の在日中国人児童生徒の調査からは、「違和感」や「困難」がある程度共通していることがわかった。

2018 年度の在中日本人生徒の調査からは、滞在年数の違いによる「文化スキーマ」の変化が見られた。

2019 年度の在日外国人社員の調査は、インタビューが中心となった。国籍は様々であるが、やはりある程度共通する傾向が見られた。

【考察】

滞在年数による違いなどから「文化スキーマ」の変化が明らかとなった。発表者は医学関係者ではないため、神経回路網がどうなっているかは判断できない。今後は、「文化スキーマ」の変化を医学的に解明することは可能か等新たな方法を考察し、異文化間を移動する人たちの「違和感」や「困難」の解決の一助としたい。

病院通訳者の通訳の正確性に関する分析の試み－コーダー間信頼性の検討－

濱井妙子¹⁾ 永田文子²⁾ 大野直子³⁾ 西川浩昭⁴⁾

1) 静岡県立大学看護学部 2) 千葉大学大学院看護学研究科 3) 順天堂大学国際教養学部 3) 聖隷クリストファー大学看護学部

【背景】グローバル化が進展する中、医療通訳体制整備が喫緊の課題となっている。

【目的】病院通訳者の通訳の正確性分析におけるコーダー間信頼性を検討する。

【方法】2017年2月～3月に、病院通訳者が介在した診療を録音し、通訳の正確性を分析した。対象者は外国人患者受入れ拠点病院のブラジル人患者、病院通訳者、医師とした。音声データは逐語録を作成し、ポルトガル語を翻訳し、バックトランスレーションを経て、分析データセットとした。分析方法は逐次通訳をした発話を一つの通訳ユニットとし、通訳者が通訳を変更した単語やフレーズをカウントした。通訳変更は第1段階で4種類(省略、言い足し、誤訳、編集)、第2段階でネガティブ4種類とポジティブ2種類(省略、言い足し・編集)に分類した。2名のコーダー間信頼性は10診療12件(16.4%, 19.0%)を無作為抽出し、Pearsonの相関係数を用いて検討した。本研究は本学と対象病院の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】10診療は産婦人科4(19.0%)、小児科4(23.5%)、整形外科2(18.2%)であった。診療時間は中央値9分11秒(5分44秒～57分12秒)、一診療あたりの通訳ユニット数は66.5(37～213)であった。コーダー間相関係数は第1段階では「省略」0.924、「言い足し」0.927、「誤訳」0.780、「編集」0.899であった。第2段階ではネガティブ分類が「省略」0.938、「言い足し」0.975、「誤訳」0.780、「編集」0.928、ポジティブ分類が「省略」0.858、「言い足し・編集」0.692であった。

【考察】通訳の正確性分析において Pearson の相関係数によるコーダー間信頼性は 0.692～0.975 の範囲であった。相関係数が低い分類については、コーダー間で再検討することにより信頼性をあげることが可能と考えられる。

住民参加型アプローチを用いた「健幸かるた」の作成と普及

齋藤彩¹⁾ 日下部ゆき¹⁾ 五十嵐真実¹⁾ 宮越麻里¹⁾ 秋山美紀^{1,2)}

1) 慶應義塾大学先端生命科学研究所「からだ館」 2) 同大学環境情報学部

【背景と目的】

地域包括ケアでは、住民が主体的に介護予防や健康増進に取り組むことが掲げられているが、動機付けや行動変容に効果が報告された教材は少ない。一方、住民の中で他の人より上手に問題を解決している者の実践知を共有する「ポジティブ・デビアンズ」という方法が、近年、ヘルスプロモーション分野でも注目されている。そうしたことを念頭に、地域住民の健やかに暮らす実践や知恵を共有し、それらを読み札とした「健幸かるた」を制作し、それを普及することで、住民が遊びを通して気づきや意欲を高められるような仕掛けづくりに取り組んだ。本稿では、作成プロセスと、効果検証に向けたインタビュー調査の結果を紹介する。

【方法】

山形県庄内地方で、健康教室等の場で趣旨を説明し、自薦、他薦を含めて、健やかで前向きに暮らす実践者 20 名を集めた。この 20 名を中心に計 95 名が、9 回の制作ワークショップに参加し、日々の実践や心掛けていることを句に落とし込む作業を行った。遊びながら教育効果を高める工夫として、絵札の裏面に句に関する短い解説文を記載し、札を取った人がそれを読み上げるという仕掛けを組み込んだ。集まった句は、生活習慣、病気との向き合い方、健康情報リテラシーに関するものなど様々であった。かるたは、数度のお披露目会で使い方を紹介した後、介護予防の場などに貸し出し普及をしている。6 団体 17 名に半構造化インタビュー調査を行い、主観的効果等を訊ねた。

【結果と考察】

かるたの主観的効果として、〈内容への共感・納得感〉、〈自己肯定感の高まり〉、〈競い合うことの刺激〉、〈自身の機能低下への気づき〉、〈仲間のことをより深く知る〉といったカテゴリーが抽出された。また、札を取った人が本人の体験を語ることで会話が発展する、経験談や失敗談で盛り上がるという報告があった。読めない人、取れない人への配慮やサポートも、それぞれの場で自発的に行われていることがわかった。かるたは誰もが幼少期に体験した遊びであり、高齢者でも意欲的に取り組みやすい。当該地域住民の知恵から生まれた内容は受け入れられやすく、楽しく遊びながら普及につながることを示唆された。

地域組織活動活性化要因の把握と尺度の開発

蝦名玲子^{1,2)} 上野治香¹⁾ 大島敦子³⁾ 横山光政³⁾ 木内貴弘¹⁾ 石川ひろの⁴⁾ 坂本伸江⁵⁾ 渡邊由美子⁵⁾

1) 東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学, 2) 株式会社グローバルヘルスコミュニケーションズ, 3) 大分県国民健康保険団体連合会, 4) 帝京大学大学院公衆衛生学, 5) 大分県竹田市役所

【背景】ヘルスコミュニケーションとは「人々に、健康上の関心事についての情報を提供し、重要な健康問題を公的な議題として取り上げ続けるための主要戦略のこと」と定義づけられている(WHO, 1996)。しかし地域組織活動現場においては本視点が欠けている。地域組織活動の重要性は「健康日本 21(第二次)」でも指摘されているが、活動の活性化要因は明らかになっていない。

【目的】本研究では、地域組織活動活性化要因を明らかにし、実践者が活性化に向けて活用できる「地域組織活動活性化尺度」を開発することを目的とした。

【方法】大分県竹田市の保健専門職 16 名は活動活性化に必要な要素をあげ、KJ 法を用いて 23 項目の調査票にまとめ、同市の地域組織会員 220 名より欠損値のない回答を得た。項目分析後、探索的因子分析により尺度の項目選定を行い、内的一貫性及び確証的因子分析における適合度の確認により、尺度の信頼性と因子的妥当性を検討した。併存的妥当性は、「活動成果指標尺度」との相関により検討、Pearson の相関係数を算出した。また属性による尺度得点の比較を行った。

【結果】項目分析後、歪度・尖度に偏りが認められた 3 項目を削除した。探索的因子分析では、地域組織活動の活性化に必要な要素が 5 因子あることを確認し、「地域組織活動活性化尺度」(20 項目)とした。尺度全体の α 係数は 0.91、各因子では 0.69~0.86 の範囲内であった。併存的妥当性の指標との相関係数は、尺度全体で 0.71、各因子では 0.10~0.65 の範囲内であった。また確証的因子分析において、概ね許容できる適合度指標が得られた(GFI=0.87、AGFI=0.83、CFI=0.91、RMSEA=0.07)。

【考察】本研究では、地域組織活動活性化要因を明らかにしたうえで、「地域組織活動活性化尺度」を開発し、本尺度が一定の信頼性と妥当性を有することを確認した。今後、エンパワメントとヘルスリテラシー、首尾一貫感覚との関連から理解を深めるとともに、縦断研究により予測的妥当性を検討する必要がある。

地域で看護職が実践する社会貢献活動の特性

－在宅精神療養者を支援する NPO 活動の事例から－

成 玉恵¹⁾

1) 千葉県立保健医療大学

【背景】近年、地域において看護職による多様な社会貢献活動が報告されるようになった。これらの活動は看護職が日頃から感じている地域や社会の課題をテーマとしたものが多く種類は多様で独創的である。しかし、活動は実践報告のみで不明な点が多い。

【目的】本研究では、NPO 法人の活動を一事例とし、地域で看護職が実践する社会貢献活動の特性を明らかにする。

【方法】まだ研究されていない事例が持つ独自性や特異性を説明することに重きをおくため、対象は地域で看護職が社会貢献活動を実践する NPO 法人 1 団体とした。また、活動に詳しい看護職者 1 名に半構成的面接調査を行い、活動の現状等の情報を収集した。調査内容は逐語録を作成し、質的帰納的にカテゴリー化した。

本研究は、所属大学研究等倫理委員会の承認を受け実施した。なお、開示すべき利益相反はない。

【結果】対象団体は、2007 年から A 県 C 市で、在宅精神療養者を対象に ACT プログラムによる支援を実施していた。研究参加者は年齢 50 歳代、女性、NPO 団体の理事であった。活動の特性については、111 のコードから 6 のカテゴリー「看護の専門性を活かした予防的な介入による危機回避」「あらゆる生活支援による自宅生活の維持」「個人、チーム、職種それぞれの強みを活かした支援」「支援スキルをサポートする仕組み」「収益と損益のバランスを考えた経営の工夫」「過重労働になりがちな働き方を適正化したバーンアウトの予防」が抽出された。

【考察】活動の特性は、看護の専門性を活かした危機管理・セルフケア、職種のフラット化や徹底したチームワークによる組織力の高さ、工夫による柔軟な経営、職員の自律性を担保としたやりがいのある職場作りがあげられる。

これは個別性の高い支援を実現するための要素であり、NPO 法人の役割を果たすものと考えられる。今後、公的制度では担えない支援が期待される一方、収入の安定化や職員のバーンアウトの課題が推察される。

健康をデザインする ～経験・知恵・アイデアの共有・統合・共創

を目指す“領域”と超えた創発プラットフォームの挑戦

戒田信賢^{1) 2) 3)} 中山健夫¹⁾

1) 京都大学医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野 (SPH)

2) 株式会社電通

3) 慶應義塾大学 SFC 研究所

【背景】

医療や保健、福祉、介護、子育て支援などさまざまな領域で、そのターゲットとなる生活者や患者の方々を「健康」にするために健康実務家は尽力している。それぞれに強みを持つ研究者/臨床家、行政担当官、NPO/NGO/企業実務家など、各領域で尽力するプレイヤーが、その立場を超え、協力して行くことが今まさに求められている。

【目的】

我々実務家の取組の先にある「社会における“健康の総量”」を増やすために、立場・領域を超えて「経験」「知恵」「アイデア」を共有し、統合し、共創していくことを目的とする。

【方法・結果】

- ① 上記の目的をプラットフォームとなるウェブサイト健康 design studio の立ち上げ
→2019年5月1日当サイト立ち上げ(<https://kenko-design.studio>)
- ② 経験・知恵の【共有】を促進する「記事」の配信
→「つたえ方」「企画のつくり方」「実践事例紹介」を中心とした記事制作(約4本/月)
- ③ 経験・知恵の【統合】に向けた産学連携講義の実施
→2018年京都大学 SPH での通年講義の実施「健康デザイン論」※2019年も実施

【考察・課題】

サイト開設より3ヶ月が経ち、賛同者やフォロワーは徐々に増加傾向。今後の更なる発展に向けた課題認識は以下の通り。

- 賛同者・共同企画者の募集
- 想定読者である健康実務家のニーズ・期待の更なる把握とコンテンツへの反映
- 健康実務家への認知促進およびユニークユーザーの増加
- 記事の安定供給体制の構築
- 具体的な健康課題解決を見据えた「共創型施策プランニング」の実施
- “共創された企画”の産官学連携による実現に向けたシナリオの構築・実施

ヘルスコミュニケーション分野での仮想現実（VR）活用領域の可能性に関する検討（実践報告）

秋山美紀¹⁾²⁾³⁾ 下河原忠道⁴⁾ 堀田聡子²⁾ 北野華子³⁾ 武林亨²⁾

1) 慶應義塾大学環境情報学部 2) 慶應義塾大学院健康マネジメント研究科 3) 慶應義塾大学院政策・メディア研究科 4) (株)シルバーウッド

【背景と目的】

近年、コンピュータによって仮想空間を現実として知覚させる仮想現実(以下 VR)の技術が急速に普及しており、ヘルスコミュニケーション分野での応用も進んでいる。本研究は、大学院教育の一環として、アドボカシーの意図を持って制作された複数の VR コンテンツを大学院生に視聴してもらい、視聴者が受けるインパクトや効果、VR 技術が効果を発揮するコンテンツの可能性を検討することを目的とした。

【方法】

視聴したコンテンツは、認知症当事者の体験(4 本)、LGBT 当事者の体験(1 本)、救急搬送された高齢者の体験(1 本)で、いずれも(株)シルバーウッドが制作した。各コンテンツの長さは、数分～最大 15 分である。被験者は、2017 年度と 2018 年度に筆者らが担当する「ヘルスコミュニケーション」の授業を履修した大学院生計 36 名で、各コンテンツ視聴後に、受けた印象や感覚、起きた気持ちの変化を、各自がワークシートに記載した。さらにメディアとしての VR の特徴を共有した上で、今後制作すると良いと思われるコンテンツについて、グループで議論し提案してもらった。ワークシートの自由記載欄は、VR 視聴から受けた印象や変化を表す部分を 1 つの記録単位とし、記録単位の意味内容の類似性によりサブカテゴリー、カテゴリーとしてまとめた。

【結果と考察】

360 度の視野と音響に身を置くことでその世界に入り込める【没入感】に関連して、〈能動的に場に参加している感覚〉、〈五感を使う全身体験〉、〈気持ちや感情の当事者体験〉、〈自分ごととしての葛藤の体験〉、〈他人の認識と当事者視線の両方の獲得〉といったサブカテゴリーが抽出された。視聴後には、「価値観が塗り替わった」、「自分はどうあるべきかを考えなおした」、「どう接すればいいのかわかった」といった発言があった。今後制作するコンテンツとしては、「いじめ」、「自殺」、「視覚障害者」、「病院での拘束」、「子どもの安全」、「発達障害」等の当事者の体験や気持ちをリアルに描くことの意義が提案された。

現実に近い感覚を与える VR は、障害や疾患を持つ人々へのステレオタイプの解消や、アドボカシーの一助になる可能性が示された。

医療従事者と患者の共通理解を得るための新しい試みと可能性

飯村隆志¹⁾、土井 義広¹⁾、山口 航¹⁾

1) 特定非営利活動法人健康サポーターJAPAN

【背景】

医療現場におけるコミュニケーションはこれまで多くの専門家によって研究され、よりよいコミュニケーション実現のために議論されてきた。我々は病気で悩む患者・家族をサポートする活動をしているが、医療に対する不満を頻繁に耳にする。医療は患者から誤解されていると感じることがある。

【目的】

医療従事者、患者のビジョン(想い)を共有することによって、お互いの認識がどのように変化するかを検証した。

【方法】

医療従事者と非医療者の我々が協力して、4か月の時間をかけてオリジナルのストーリーのビジョンムービーを作成した。ムービーをステージ上で発表するイベント「医療ドリームプラン・プレゼンテーション」を開催し、100人の聴衆の前で動画を発表した。会場から回収したアンケートを解析し、発表者、聴衆の医療に対する意識の変化を評価した。

【結果】

2017年、2018年の2度イベントを開催し、それぞれ32枚(内医療従事者25%)、49枚(内医療従事者29%)のアンケートを回収した。医療に対する前向きなコメントを得ることができた。「医療従事者を応援したい」、「これからの医療について一緒に考えていきたい」、「医療への希望を持つことができた」、「忙しいことを言い訳にして心のケアという看護の資格を取った時の想いを思い出した」。医療に関わる人にムービーを見て欲しいというコメントが多くあった。

【考察】

診療の中で伝えられることがない医療従事者、患者のビジョン(想い)が共通言語となり、ビジョンを共有することにより相互理解が得られる可能性があることが分かった。ビジョンムービーの制作を通じて、今後も医療従事者と患者・家族の良好なコミュニケーションの実現に貢献する。